論文

大学初年次生における適応感とキャリア意識との関連

澤田　忠幸[*1]

要　旨

本研究では、2020 年度と 2021 年度の各前期終了時に、A 大学に在籍する 1 年生を対象に、大学適応感とライフキャリアに対する意識に関する調査を行った、最初に、2 年間の学生の傾向を検討したところ、適応感およびキャリア意識には両年度で違いは認められず、男性よりも女性の方が、適応感が高い傾向が示された。そのうえで、適応感とキャリア意識との関連を検討したところ、居心地の良さ感や目標に向けての充実感、周囲からの信頼感といった肯定的な適応感の側面が、キャリア意識の各側面と関連していることが明らかとなった。なかでも、キャリア意識の重要な側面と考えられる将来に向けた展望や設計、意思決定スキルを有する程度では、適応感の側面のうち、学生生活に居心地の良さを感じているだけでは不十分であり、自身の課題や目的を明確に有し、周囲との信頼関係を築いていることが、重要な基盤となっている可能性が示された。

キーワード：大学初年次生／適応感／キャリア意識

1. はじめに

2010 年の『大学設置基準』の改正と翌 2011 年の中央教育審議会答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』を受けて、大学教育において、キャリアあるいはキャリア教育が注目されるようになった（溝上・畑野，2013）。すなわち、それまで正課外での自発的な就職等の支援活動と見なされていたキャリアガイダンス（社会的・職業的自立に関する指導等）が、大学教育の一環として法制上に位置づけられるとともに、学校教育の全課程を通じて、キャリアデザインの重要性と学修成果としての基礎的・汎用的能力（ジェネリックスキル）の修得が明示されることとなったのである。

これらの政策動向の背景には、先の見えない不確かな時代、あるいは、常に情報が更新される知識基盤社会と言われる今日においては、これから社会に出て行く若者は、これまでのように学校教育において既有知識を受動的に習得するだけでは、人生の様々な局面を切り開いていくことが困難であるとの認識がある。そのため、様々な場面で転用可能な汎用的技能の修得や自らの生き方を主体的に設計、修正していくキャリアデザインの重要性が強調されたといえる。

2021 年度は、上述したキャリア教育の一大転機となる政策指針が示されてから、ちょうど 10 年の節目の年にあたる。この間、数多くの先進的な取り組みが報告されてきた（e.g. 神原・山本・湯口・三保，2019；永作・三保，2019；日本キャリア教育学会，2020）。

その中で、学士課程を通じて、キャリア意識の醸成の程度と正課学修への関与（engagement）のあり方、あるいは、汎用的技能の習得度との関連性が指摘されてきた（半澤，2011；小山，2016）。たとえば、将来の展望と日常生活とを接続する行動（e.g. 私は将来のために頑張っていることがある）を行っている者（学部 3 年生）は、大学での学習へも積極的な関与（e.g. 授業外学習時間が長い）が見られること（溝上・畑野，2013）、学業と職業の接続を意識している者（短大 2 年生）ほど、汎用的技能の習得感が高いこと（小山，2016）等が明らかにされている。澤田（2020）も、自分の将来に対して主体的にキャリアデザインができている者は、インターンシップ参加の有無にかかわらず、学部 3 年前期終了時での汎用的技能のうち、コンピテンシーが高いことを報告している。

一方、大学におけるキャリア教育の入口となる高大接続の観点からは、初年次教育を通じた入学後初期段階における学生の適応支援の重要性が指摘されている。たとえば、濱名（2007）や川島（2013）、高橋・星野・溝上（2014）は、大学入学後の 1 年前期での適応の有無が、その後の大学生活や学修成績（e.g. GPA）に影響することを指摘している。さらに、学習面での適応との関連を検討した伊藤・王（2015）

[*1] 石川県立大学　生物資源環境学部　教養教育センター

は、自己調整的な学習方略（self-regulated learning strategy）を習得している者ほど、大学での学習に対し積極的に関与していることに加え、ライフキャリアに対する意識が高いことを明らかにしている（注 1)。また、鈴木・鈴木（2019）も、大学での学習への取り組み方や学習目標の明確化といった点に加え、学生の大学生活への初期適応への支援も、その後のキャリア意識に影響する可能性を指摘している。

さて、以上の議論を踏まえると、入学後初期の大学生活への適応の成否は、その後の学修成績のみならず、就職活動期に至るキャリア意識、あるいは、その学習成果と見なされる汎用的技能の修得度とも関連することが予想される。しかし、これまで初年次教育とキャリア教育とは別の文脈で議論されることが多く、入学後の初期段階における大学適応のあり方とキャリア意識との関連を検討した研究はほとんどない。

そこで、本研究では、地方 A 大学の 1 年生（2020 年度入学生・2021 年度入学生）を対象として、初年次教育科目受講後の前期終了時における大学適応感とライフキャリアに対する意識との関連のあり方について検討を行うことを目的とした。

ここで適応感（subjective adjustment）とは、「個人が当該の環境を自分と合った居場所と認識する感覚あるいはフィット感」を指している（大久保・青柳，2003；大久保，2005)。本定義では、授業への出席状況や単位取得状況等の外的状況を指標として個人の適応を捉えたり、対人関係、学業等の要因に対する内省の集合として適応感を捉えたりするのではなく、個人と環境が適合しているときに認識する認知や感情そのものに焦点を当てている点に特徴がある。このような概念化のもと、大久保・青柳（2003）および大久保（2005）は、周囲と馴染めている快適さを表す「居心地の良さの感覚」、周囲からの信頼や受容感を表す「被信頼・受容感」、目標に向けての充実感を表す「課題・目的の存在」、周囲への違和感のなさを表す「拒絶感のなさ」の 4 因子 29 項目からなる適応感尺度を作成している。

本研究では、具体的には大久保ら（大久保・青柳，2003；大久保，2005）の適応感尺度と河崎（2010）のライフキャリア尺度を用いて、両者の関連について検討を行った。

2. 方法

(1) 調査対象と手続き

地方 A 大学における 2020 年度 1 年生 131 名および 2021 年度 1 年生 141 名の計 272 名を対象に、各年度の前期終了時にオンラインによる調査を実施した。その際、本研究は A 大学の教学改善およびキャリア教育の整備に向けた教学 IR 研究プロジェクトの一部であり、同大学人権・倫理委員会研究倫理部会の承認を得て実施していること、回答内容が成績評価に影響することはないこと、個人情報は適切に取り扱うこと等を説明したうえで協力を求めた。

(2) 調査内容

1）適応感　自宅でのオンライン授業が中心となった 2020 年度の学生状況に合わせて、大久保・青柳（2003）の項目に若干の修正を加えるとともに、大久保（2005）からも項目を追加して 32 項目作成した。入学式から現在（前期終了時点）に至る自身の A 大学での学生生活を振り返り、各項目の内容を認識している程度について、「とてもそう思う（5)」～「全くそう思わない（1)」の 5 件法で回答を求めた。

2）キャリア意識　河崎（2010）のライフキャリア尺度 21 項目を用いた。本尺度は、大学生のライフキャリアの能力や態度を、幅広く 6 因子（「将来展望・設計」「情報収集・啓発的経験への積極性」「意思決定スキル」「肯定的な自己理解」「他者との関係重視」「生活経験・ライフバランス」）から測定することを意図して作成されている。各項目について、「とてもそう思う（5)」～「全くそう思わない（1)」の 5 件法で評定を求めた。

3. 結果と考察

2020 年度は 130 名（男性 68 名、女性 62 名）、2021 年度は 140 名（男性 53 名、女性 87 名）から回答を得た。

(1) 各尺度の因子構造

最初に、回答の得られた計 270 名のデータを用いて、適応感とキャリア意識の各尺度について主因子法による因子分析を行い、因子構造を確認した。

1）適応感　プロマックス回転後のパターン行列を表 1 に示す。大久保・青柳（2003）や大久保（2005）で想定された「被信頼・受容感（α=.84)」「課題・目的の存在（α=.78)」「居心地の良さの感覚（α=.86)」「拒絶感（α=.77)」の 4 因子が抽出された。

確認的因子分析を行ったところ、モデルとデータとの適合度を示す各種適合度指標値は、GFI=.933, AGFI=.901, CFI=.959, RMSEA=.057 であり、適合度は概ね良好であった。

2）キャリア意識　プロマックス回転後のパターン行列を表 2 に示す。概ね河崎（2010）で想定された 6 因子（「将来展望・設計（α=.82)」「肯定的な自己理解（α=.75)」「意思決定スキル（α=.69)」

「情報収集・啓発的経験への積極性（α=.62）」「他者との関係重視（α=.58）」「生活経験・ライフバランス（α=.48）」）が確認された。しかし、抽出された因子のうち、「他者との関係重視」および「生活経験・ライフバランス」の2因子では、因子の内的整合性を示すα係数が極めて低かったことから、以下の分析からは除外することとした。残る4因子について確認的因子分析を行ったところ、GFI=.944, AGFI=.918, CFI=.953, RMSEA=.048であり、モデルとデータとの適合度は良好であった。

表1　適応感尺度の因子分析結果
（主因子法, プロマックス回転）n =270

	被信頼・受容感	課題・目的の存在	居心地の良さの感覚	拒絶感
必要とされていると感じる	.850	.017	.001	.034
他人から頼られていると思う	.680	.000	.173	.116
他人から関心を持たれている	.649	-.085	-.011	-.021
一定の役割がある	.608	.130	-.076	.096
存在を認められている	.572	-.017	-.002	-.263
よい評価がされていると感じる	.443	.119	-.023	-.249
毎日が充実している＊	.061	.783	.056	.083
満足している	-.002	.674	.061	-.013
退屈である（R）	.066	-.613	-.058	.163
熱中できるものがある	.197	.498	-.244	.087
好きなことができる	-.015	.483	.115	.093
意欲が湧かない＊（R）	-.005	-.463	-.008	.171
寂しさを感じる（R）	.163	-.414	.025	.248
自由に話せる雰囲気である	-.175	.044	.850	-.004
周囲となじめている＊	.107	-.100	.804	-.031
周りの人と楽しい時間を共有している	.104	.202	.709	.223
周囲に溶け込めている	.221	-.078	.594	-.021
孤立している（R）	-.093	-.019	-.418	.292
嫌われていると感じる	-.029	-.017	.215	.830
無視されていると感じる	.120	-.077	-.047	.655
自分が場違いだと感じる	-.119	-.025	-.197	.496
浮いている	-.025	.128	-.350	.489

因子相関行列

被信頼・受容感			
課題・目的の存在	.527		
居心地の良さの感覚	.703	.460	
拒絶感	-.499	-.313	-.594

そこで、以下の分析では、適応感およびキャリア意識の各4因子について、逆転項目については処理を行ったうえで、各因子の素点合計を項目数で除した尺度得点を用いることとした。

(2) 入学年度および男女差の検討

次に、入学年度や性による傾向を確認するため、分析対象とした270名の各尺度得点を用いて、入学年度および男女ごとに平均値と標準偏差を算出した（表3）。そして、これらの値を用いて、入学年度（2）×性（2）の分散分析を行った。その結果を以下に示す。

1）適応感　「居心地の良さの感覚」因子でのみ、入学年度の主効果に有意傾向が示されたが（$F(1, 266)=3.69$, $p<.10$；2021年度生≧2020年度生）、いずれの因子においても、入学年度の主効果は有意には至らなかった。

一方、「被信頼・受容感」（$F(1, 266)=4.38$, $p<.05$）、「課題・目的の存在」（$F(1, 266)=8.50$, $p<.01$）、「居心地の良さの感覚」（$F(1, 266)=7.13$, $p<.01$）、「拒絶感」（$F(1, 266)=8.41$, $p<.01$）の全ての因子で性の主効果が有意であった。すなわち、男性よりも女性の方が、自己の課題や目的の存在を認識しており、周囲からの被信頼・受容感、居心地の良さの感覚が高く、拒絶感が低かった。

2）キャリア意識　いずれの因子においても、入学年度の主効果は有意には至らなかった。一方、

表2　キャリア意識尺度の因子分析結果（主因子法, プロマックス回転）n =270

	将来展望・設計	肯定的な自己理解	意思決定スキル	情報収集・啓発的経験への積極性	他者との関係重視	生活経験・ライフバランス
今後の人生に向かって，準備していることがある	.844	-.086	.058	.049	.006	-.178
今後の人生向かって，何か計画している	.820	.021	.055	-.004	-.052	-.056
今後（将来）の仕事や人生についての展望をもっている	.638	.067	-.026	.026	-.065	.165
今後（将来）の仕事や生活において必要とされること（経験）に現在取り組んでいる	.544	.029	.048	.027	.029	.109
自分のことが好きである	-.084	.856	-.012	.017	-.035	-.005
自分自身に自信をもっている	.028	.779	.115	-.056	-.148	.011
毎日の生活が楽しい	.141	.536	-.214	.053	.240	-.024
重要な決定の結果，起こってくるいろいろな可能性について推測できる	.072	-.070	.647	-.070	-.010	-.014
困難な事態に直面したとき，どこに問題があるのか，すぐに見つけることができる	.010	.110	.637	.004	.097	-.137
より良い解決策を見つけるために，できるだけ多くの情報を集められる	.079	-.081	.583	.044	.099	.021
目標を決めたら，どうすればうまく行くのか考えて準備する	.028	.004	.421	.009	-.041	.226
今後（将来）の仕事や人生が気になっている	.123	-.131	-.128	.716	-.111	.090
今後の仕事や生き方を見つけるために，さまざまな経験をおこないたい	.090	.064	.056	.677	.000	-.061
自分の能力や個性を活かす仕事には，どのようなものがあるのか知りたい	-.280	.043	.244	.442	-.043	.083
周囲の人の仕事や勉強・研究の内容や進め方について知りたい	-.003	-.014	-.052	.369	.158	-.008
仕事や大学での勉強，生活に関するさまざまな経験は，今後の人生に役立つと思う	.090	.112	-.070	.340	.138	.035
人との調和やルールを重んじている	-.038	-.051	-.036	-.076	.779	.098
他の人に対して，誠実であるように心がけている	-.022	-.023	.128	.053	.499	-.041
人とのつながりを大切にしている	-.046	.044	.153	.163	.392	-.020
職業は，家庭や地域生活とバランスが取れるようにすることが大事だと思う	-.092	-.020	-.051	.131	.029	.634
家庭・地域・職業生活を視野に入れて，ライフバランスを調和的に設計している	.273	.029	.111	-.147	.052	.473

因子相関行列

将来展望・設計					
肯定的な自己理解	.303				
意思決定スキル	.371	.318			
情報収集・啓発的経験への積極性	.234	.196	.148		
他者との関係重視	-.021	.215	.197	.257	
生活経験・ライフバランス	.269	.274	.224	.229	.300

表 3　入学年度および男女ごとの適応感および
キャリア意識得点の平均値と標準偏差

	2020年度		2021年度	
	男性	女性	男性	女性
適応感				
被信頼・受容感	2.91 (0.677)	2.97 (0.721)	2.82 (0.640)	3.10 (0.645)
課題・目的の存在	3.20 (0.771)	3.37 (0.690)	3.12 (0.696)	3.47 (0.698)
居心地の良さの感覚	3.40 (0.806)	3.56 (0.861)	3.49 (0.667)	3.84 (0.710)
拒絶感	2.32 (0.759)	2.19 (0.760)	2.50 (0.619)	2.13 (0.657)
キャリア意識				
将来展望・設計	3.08 (0.965)	2.97 (0.932)	2.85 (0.932)	2.93 (0.826)
肯定的な自己理解	3.03 (0.895)	3.03 (0.880)	2.84 (0.831)	3.10 (0.799)
意思決定スキル	3.40 (0.635)	3.45 (0.733)	3.66 (0.611)	3.38 (0.604)
情報収集・啓発的経験への積極性	4.32 (0.552)	4.46 (0.508)	4.22 (0.556)	4.45 (0.430)

注：括弧内の値は標準偏差を示す

「情報収集・啓発的経験への積極性」因子で、性の主効果が有意であり（F（1, 266）=8.59, p<.01）、男性よりも女性の方が、将来についての興味関心が高かった。また、「意思決定スキル」因子では、両要因間の交互作用が有意であった（F（1, 266）=4.18, p<.05）。2020年度生では男女差が見られなかったが、2021年度生では、女性よりも男性の方が、意思決定スキルが高かった。

(3) 適応感とキャリア意識との関連

入学年度および男女を込みにして、適応感とキャリア意識との関連の有無を検討するために、各因子間の相関係数を算出した。その結果を表4に示す。

拒絶感が低いほど、肯定的な自己理解が高かった。居心地の良さの感覚が高いほど、あるいは、課題・目的の存在が明確で充実感が高いほど、肯定的な自己理解や将来に対する展望と設計に加え、将来に対する情報収集あるいは意思決定スキルが高いことが示された。さらに、被信頼・受容感が高いほど、キャリア意識の各側面が高いことが示された。

これらのことから、大学生活に対する適応感の高さは、拒絶感のなさはもちろんのこと、居心地の良さを感じ、自己の課題や目的が明確で充実感を感じていること、さらには、周りから信頼されている、受け入れられていると感じることが、段階的に自己のキャリア意識と結びついていくことが示唆された。

そこで、個人が有する適応感の4因子のバランスがキャリア意識に及ぼす影響を検討するために、適応感4因子の得点を用いて階層クラスタ分析（*Ward*法）を行い、適応感の類型化を試みた。そして、デンドログラムの結果より、最終的に3クラスタを抽出した（図1）。

表 4　適応感とキャリア意識との相関係数（n =270）

	キャリア意識			
	将来展望・設計	肯定的な自己理解	意思決定スキル	情報収集・啓発的経験への積極性
適応感				
被信頼・受容感	.305 ***	.475 ***	.271 ***	.147 *
課題・目的の存在	.244 ***	.504 ***	.148 *	.112
居心地の良さの感覚	.140 *	.386 ***	.108	.185 **
拒絶感	-.055	-.384 ***	-.072	-.101

注：*** p <.001, ** p <.01, * p <.05 を示す

クラスタ1（n=134, 49.6%）は、「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「居心地の良さの感覚」の3側面が高く、「拒絶感」が低いタイプである。全体としてバランスよく適応感のポジティブな側面が高く、対人関係面と自身の目標の両面でバランスのとれた「自律的適応型」といえる。クラスタ2（n=73, 27.0%）は、「居心地の良さの感覚」が高く、「拒絶感」は低いが、「被信頼・受容感」および「課題・目的の存在」は意味上の中央値の3点をやや下回っていた。学生生活に不適応を感じているわけではないが、対人関係や学修目標等、大学生活に積極的に関与しているとまではいえないタイプであり、日常生活での快適さに基づく「情緒的適応型」といえる。クラスタ3（n=63, 23.3%）は、「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「居心地の良さの感覚」の3側面に比べ「拒絶感」が高く、「拒絶感」以外は3点以下を示していることから、「適応不十分型」と見なすことができる（注2）。

抽出されたクラスタ間で、適応感4因子の尺度得点に違いが見られるか否かを検討するために一元配置の分散分析と*Tukey*法による多重比較を行ったところ、弁別性が確認された。すなわち、「被信頼・受容感」（F（2, 267）=105.45, p<.001）および「居心地の良さの感覚」（F（2, 267）=166.32, p<.001）得点は、クラスタ1（「自律的適応型」）で最も高く、クラスタ2（「情緒的適応型」）、クラスタ3（「適応不十分型」）の順に、クラスタ間で有意に得点が低下した。「拒絶感」（F（2, 267）=154.61, p<.001）では逆に、クラスタ3（「適応不十分型」）で最も高く、クラスタ2（「情緒的適応型」）、クラスタ1（「自律的適応型」）の順で、有意に得点が低下した。これに対し、「課題・目的の存在」（F（2, 267）=115.67, p<.001）の得点は、クラスタ2（「情緒的適応型」）とクラスタ3（「適応不十分型」）の間に違いは認められず、両者よりもクラスタ1（「自律的適応型」）

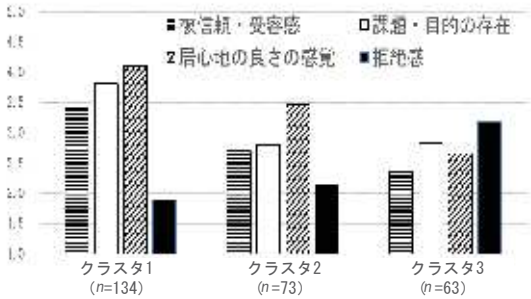

図 1　適応感尺度によるクラスタ分析結果

で有意に高かった。

以上の点を踏まえ、クラスタ間でキャリア意識の各側面に違いがあるのか否かを検討するため、クラスタごとの平均値と標準偏差を算出し（表5）、一元配置の分散分析を行った。その結果、「将来展望・設計」（F（2, 267）=4.88, p<.01）、「肯定的な自己理解」（F（2, 267）=34.54, p<.001）、「意思決定スキル」（F（2, 267）=5.00, p<.01）の3因子で、クラスタの主効果が有意であった。「情報収集・啓発的経験への積極性」因子では、有意傾向のみが示された（F（2, 267）=2.91, p<.10）。

Tukey 法により多重比較を行ったところ、クラスタ2（「情緒的適応型」）よりもクラスタ1（「自律的適応型」）の方が「将来展望・設計」および「意思決定スキル」因子の得点が高かった。加えて、クラスタ3（「適応不十分型」）よりもクラスタ2（「情緒的適応型」）、クラスタ2（「情緒的適応型」）よりもクラスタ1（「自律的適応型」）の方が、「肯定的な自己理解」因子の得点が高いことが明らかとなった。また、クラスタ3（「適応不十分型」）よりもクラスタ1（「自律的適応型」）の方が「将来展望・設計」因子の得点が高い傾向にあることが示された。

4. 総合的議論

本研究では、2020年度と2021年度の各前期終了時に、A大学に在籍する1年生計270名を対象に、大学適応感とライフキャリアに対する意識に関する調査をおこない、A大学1年生の傾向と両者の関連性について検討を行った。

その結果、1年前期終了時点での学生の適応感およびキャリア意識には、2020年度生と2021年度生で明確な違いは認められなかった（表3）。唯一「居心地の良さの感覚」因子で、2021年度生よりも2020年度生の方が低い傾向が認められた。これは、2020年度は、コロナ禍で入学後前期の授業開始が1ヶ月遅れ、その後も6月半ばまでオンライン授業なっていたのに対し、2021年度は、途中にオンライン授業の期間はあったものの、4月当初より多くの授業で制約はありつつも、対面で開講された点が影響したものと推測できる。しかし、男女を込みにした平均値は、2020年度でも3.48（2021年度は3.71）を示しており、入学当初では不安や居場所感のなさも指摘されていたが（e.g. 澤田・新村・高橋・坂上, 2020）、幸いにも前期終了時には全体的には肯定的な適応感が醸成できていたと解釈することができる。

表5　クラスタごとのキャリア意識得点の平均値と標準偏差

	クラスタ1（自律的適応型）	クラスタ2（情緒的適応型）	クラスタ3（適応不十分型）
将来展望・設計	3.13 (0.867)	2.77 (0.871)	2.82 (0.973)
肯定的な自己理解	3.38 (0.743)	2.83 (0.758)	2.46 (0.797)
意思決定スキル	3.58 (0.556)	3.36 (0.661)	3.31 (0.769)
情報収集・啓発的経験への積極性	4.43 (0.459)	4.40 (0.505)	4.24 (0.604)

注：括弧内の値は標準偏差を示す

一方、全体として男性よりも女性の方が、自己の課題や目的の存在を認識しており、周囲からの信頼や受容感、居心地の良さ感が高く、拒絶感が低かった。α =.62と因子の内的整合性が低いため、解釈には注意が必要ではあるが、男性に比べ女性の方が、キャリア意識の将来についての興味関心が高いことも示された（表3）。

A大学に入学した理系学生という限られた対象ではあるものの、大学進学という人生の一つの転機において、男性よりも女性の方が、大学生活という新たな環境への適応のみならず、人間関係の構築が円滑に行えていることが推察される。また、進路選択において、将来に向けた自らの目標が明確である学生が、男性よりも女性の方が多いことが推察される。

さて、以上のサンプル特性を踏まえつつ、入学後の大学適応感とキャリア意識との関連を検討したところ、肯定的な適応感とキャリア意識との間には、全体として正の相関が有意であり、居心地の良さ感や目標に向けての充実感、周囲からの信頼感が、キャリア意識と関連していることが明らかとなった。

さらに、大学生活への初期適応がキャリア意識に及ぼす影響を検討するため、クラスタ分析を用いて適応感の類型を抽出し、キャリア意識の各側面に違いが認められるのか否かについて検討を行った。その結果、自尊感情（self-esteem）の側面に類似すると考えられる「肯定的な自己理解」の側面では、各クラスタ間で違いが認められた。拒絶感が強く、大学生活に適応できていないと自己を肯定的に捉えることは難しく、大学生活に居心地の良さを感じていること、さらには、学生生活に課題や目的を見出すことができており、信頼感や受容感に基づく対人関係を築けていると感じている者ほど、肯定的な自己認識を有しており、精神的に健康であることがうかがえた。本結果は、適応感と自己概念との関連を検討した鈴木・鈴木（2019）を追証するものといえる。

一方、具体的な将来に向けた行動や意識の高さを示す「将来展望・設計」の側面や自己効力感（self-efficacy）とも関連する「意思決定スキル」の側面では、クラスタ2（「情緒的適応型」）とクラスタ3（「適応不十分型」）で有意な違いは認められなかった。拒絶感がなく、居心地の良さを感じているだけでは不十分であり、課題や目的を明確にもつことや周囲との信頼関係を築いていることが重要であることが示された。「将来展望・設計」や「意思決定スキル」

の側面は、キャリア意識の中でも、実際の行動に向けた最も重要な側面であると見なすことができる（溝上・畑野，2013）。本結果は、入学後の1年前期での大学生活への適応の可否が、これまで指摘されている学修成績（e.g. GPA）や休退学率（濱名，2007;川島，2013;高橋他，2014）のみならず、キャリア意識の形成にも影響する可能性を示すものといえる。このことは、学生を迎える大学にとっては、新入生を大学入学後の早期の段階で、学びのコミュニティである大学生活に適応できるよう支援することが、学士課程を通じた学生のキャリア開発サポートの足場作りとなることを示しているといえる。

ところで、本結果については、以下の点で課題も残る。第1に、大学進学時の志望動機（e.g. 入学後の勉学志向、受験ランクによる判断）が入学後の適応感やキャリア意識と関連することが考えられる（佐藤・米光，2018）が、本研究では考慮できていない。また、大久保・西本・鷸（2021）は、入試偏差値が低い大学群では、学生が大学生活に対して自律性が求められないこと、換言すれば、学生に対する大学の手厚いサポート状況があることが、学生の適応感を高める傾向にあるという調査結果を報告している。これらの結果は、当該大学における入学生の特性や適応感の中味を検討することの重要性を指摘している。今後は、これらの点も踏まえたうえで、適応感がキャリア意識に及ぼす影響について検討する必要性がある。

第2に、神原他（2019）は、IR（Institutional Research）研究の観点から、授業目標に沿った教育効果の測定と、それらの教育効果がディプロマ・ポリシー（DP）に代表される上位の教育目標との適切な関連の有無についての検討を区別する必要のあることを指摘している。これらの知見に基づくならば、本研究のような1時点での定点測定のみならず、入学後の大学生活や学習経験を通じて、適応感やキャリア意識がどのように変化しているのか、入学後の初期適応が、卒業時に習得していることが求められる学生の資質・能力のどのような側面と関連するのかについても検討が必要となる。たとえば、キャリア教育の学修成果として、自己調整学習能力（伊藤・王，2015）や汎用的技能（小山，2016; 澤田，2020）の習得との関連についても検討が必要となる。

加えて、学生支援の観点からは、以下の点も挙げられる。すなわち、A大学の1年前期終了時点における適応感は、平均値で見ると、両年度ともに比較的良好な値を示していた（表3）。その一方で、年度に関わらず20％強の割合で、なんらかの拒絶感や居心地の悪さを感じている「適応不十分型」（クラスタ3）の者が存在することも明らかとなった（図1, 補表1・2）。「適応不十分型」の者は、他の適応類型の者に比べ、自己を否定的に捉えがちであるという結果（表5）を踏まえると、コロナ禍による影響の有無にかかわらず、入学後早期の段階で対応が必要な学生が一定数存在していることは事実として受け止める必要がある。本結果は、このような現状の一端を明らかにしたものといえる。

今後は、以上に指摘した検討課題について、学生の成長を軸に据えて、継続的かつ詳細に分析を進める必要があるとともに、本研究で得られたクラスタごとの特性を踏まえた入学後早期の段階における学生支援の具体的なあり方についても、検討していくことが必要であると考える。

注釈

1. 本稿では、キャリア（career）を職業経験に限定した「ワークキャリア」としてではなく、人生全体を見通す広義のキャリアである「ライフキャリア」の観点から捉えている。したがって、「キャリアデザイン」という用語も、将来のワーク・ライフ・バランスを含めた人生設計という意味合いで用いている。
2. 入学年度により、各クラスタの人数に多少のばらつきは見られるが（補表1）、有意な偏りは認められなかった（$\chi^2(2)=4.10$, *n.s.*）。一方、クラスタにより男女のバランスには有意な偏りが見られた（補表2）。男性より女性の方がクラスタ1（「自律的適応型」）の割合が高く、逆に女性よりも男性の方がクラスタ2（「情緒的適応型」）およびクラスタ3（「適応不十分型」）の割合が高かった（$\chi^2(2)=8.71$, $p<.05$）。

補表1　入学年度ごとのクラスタ分布（人）

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	計
2020年度	58	35	37	130
2021年度	76	38	26	140

補表2　男女ごとのクラスタ分布（人）

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	計
男性	48	39	34	121
女性	86	34	29	149

謝　辞

本研究は、2020 − 2023年度科学研究費助成事業（基盤研究C）「初年次教育は学生の汎用的技能の育成にいかに寄与しうるか？：IRの視点からの検証」（澤田忠幸・垣花渉・石川倫子）の助成を受けて行われた。

引用文献

伊藤崇達・王松. 2015. ライフキャリアの能力，態度，エンゲージメントと自己調整学習との関係. 京都教育大学

紀要．127：61-76.
大久保智生. 2005. 青年の学校への適応感とその規定要因――青年期適応感尺度の作成と学校別の検討――. 教育心理学研究. 53：307-319.
大久保智生・青柳肇. 2003. 大学生用適応感尺度の作成の試み――個人－環境の定期合成の視点から――. パーソナリティ研究. 12：38-39.
大久保智生・西本佳代・鷸綾乃. 2021. 大学生における生徒化心性および大学環境の認知と適応感との関連――生徒化心性尺度の作成と大学差による検討――. 香川教育研究. 18：113-126.
河崎智恵. 2010. ライフキャリアの能力・態度に関する尺度構成の試み. キャリア教育研究. 29：25－30.
川島啓二. 2013. 初年次におけるピア・サポートの役割と今後の課題. 初年次教育学会編. 初年次教育の現状と未来. 世界思想社. 251-262.
神原歩・山本理恵・湯口恭子・三保紀裕. 2019. 初年次キャリア教育科目の受講が新入生の大学生活への適応感に及ぼす効果. キャリア教育研究. 37：45-54.
小山理子. 2016. 学業と職業の接続意識が学修成果に及ぼす影響に関する研究. キャリア教育研究. 35：1-10.
佐藤友美・米光真由美. 2018. 大学進学の理由が大学適応感とキャリア発達に及ぼす影響――不登校傾向の高い生徒の援助への提言――. 九州工業大学教養教育院紀要. 2：17-27.
澤田忠幸. 2020. 学部3年生における汎用的技能の個人差を規定する要因 ――キャリア意識，自己調整学習方略の習得度，インターンシップ経験との関連――. 石川県立大学研究紀要. 3：89-98.
澤田忠幸・新村知子・高橋千秋・坂上千種. 2021. 学生健康調査から見る学生のメンタルヘルス――コロナ禍での学生サポートの一助として――. 石川県立大学研究紀要. 4：83-90.
鈴木公基・鈴木みゆき. 2019. 大学入学期における適応感と自己概念との関連――適応タイプによる自己概念の相違についての検討――. 関東学院大学人間環境学会紀要. 32：13-25.
中央教育審議会. 2011. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）.
永作稔・三保紀裕. 2020. 大学におけるキャリア教育とは何か. ナカニシヤ出版.
日本キャリア教育学会. 2020. キャリア教育概説. 東洋館出版社.
濱名篤. 2007. 日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果――初年次教育・導入教育・リメディアル教育・キャリア教育――. 大学教育学会誌. 29：36-41.
半澤礼之. 2011. 大学生の学びとキャリア意識の発達－大学での学びによる発達を前提としたキャリア研究という視点－. 心理科学. 32：22-29.
溝上慎一・畑野快. 2013. 将来展望と日常生活との接続が学習に与える影響―接続尺度の開発を通して―. キャリアデザイン研究. 9：65-78.
文部科学省. 2010. 大学設置基準. www.mext.go.jp/b_menu/.../1325943_02_3_1.pdf（2019年3月31日閲覧）

利益相反

開示すべき利益相反関連事項はない。

Relationship between Subjective Adjustment and Life Career Awareness in First-year Undergraduate Student

Sawada, Tadayuki (Liberal Arts Education Center, Ishikawa Prefectural University)

Abstract

This study examined the relationship between subjective adjustment and life career awareness at the end of the first semester. The data were collected over two years on first-year university students. Consequently, the subjective adjustment was higher in women than in men, regardless of admission year. However, abilities and attitudes of life career were not different between gender and admission year. Further, a relationship was found between subjective adjustment, which was constituted by aspects such as "feeling of coziness," "sense of fulfillment (clarity of issue and objectives), "feeling of being trusted and acceptance" were related to each aspect of abilities and attitude of a life career. In particular, confidence and acceptance from the learning community and a sense of fulfillment were essential for developing abilities and attitudes of life career, especially for having a vision and design for future life and decision-making skills. These results were discussed in terms of student support.

Keywords: first-year undergraduate students ／ subjective adjustment ／ life career awareness